

文学的文章の読解① (物語)

- 1
- (1) エ
(2) 悪
(3) ウ
(4) エ
(5) イ
(6) ア
(7) (例) 自分にとってあまりにも都合の良い方向へ事態が進んでいることに戸惑っている気持ち。

《解説》

- (1) 前日に先生から「明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ」と言われたのに、次の日の「僕」は学校に行く気になれなかったのですから、逆接の接続語(つなぎことば)である「しかし」が入ります。
- (2) 「悪あがき」の「あがき」は、動詞「あがく」が名詞になったことです。「あがく」とは「足掻く」と書き、馬などが前に進むと、足で地面をかく様子からきたことばです。悪あがきとは、むだにあがいて、余計悪い結果を招くことを表しています。
- (3) アとエの選択肢は、どれも一見すると本文の内容に合っているように見えます。このように、入試問題の選択肢では、正解をすぐに一つに決められない問題が多く出題されます。このような場合は、それぞれを選択肢をよく見比べて、どの部分が事実に合わせていないかを、一つ一つ検証していくようにしましょう。アは、「クラスメイトの告げ口のせい」「悔しかった」という部分が本文中の「僕」の心情としてふさわしくありません。また、本文では、「僕」の視点から、話を聞いた先生が「少し曇った顔付き」をしたり、「自分の手の爪を見つめていた」様子を描いています。ここからは、「僕」が、先生のとまどいを読み取っていることがわかります。このことから、イの「(先生に)全

てを見抜かれていることに気づき」もあてはまらないと考えられます。エは、本文には先生が「僕」を責めている様子は描かれていないので、「大好きな先生までもが自分に対して責めるような眼で見ていた」の部分が誤りです。

- (4) 物足りなかったのは、どういう期待が外れたからなのかを考えます。アは「褒めてもらえると期待していたのに、褒めてもらえなかった」という内容ですから、本文の内容に合っています。イは、「少年が先生に問い詰められる姿が見たかったのに、見られなかった」という内容なので、本文の内容に合っています。ウは「少年がどのような罰を受けることになるのか見届けたかったのに、見届けれなかった」という内容なので、本文の内容に合っています。エは、「少年がどこまで意地を張りとおすか興味深かった(知リたかった)のに、知られなかった」という内容ですが、少年ははじめから先生に対して意地を張ってはいませんから、この内容はふさわしくありません。

- (5) この問題も、選択肢一つ一つを見比べて、どこが本文の内容に合っていないのかを確かめましょう。まず、「僕」が絵具を盗んだことを悪いことだとわかっており、反省しているということをおさえましょう。アの「盗んだ罪自体をまったく無かったことにしてもらえと思った」やウの「盗みを犯したという罪が少しでも軽くなるはずだと思った」というような、自分の罪をないことにしたり軽くしたりしようという気持ちは「僕」にはみられませんから、アとウは誤りです。また、「僕」がジムの絵具を盗んだのは、ジムの絵具がほしかったからですから、エの「なぜ盗もうと考えたのかをよく思い出せない」というのは誤りです。

- (6) 先生の「よく解つたらそれでいい」ということは、「僕」への思いやりからかけられたことばだということをおさえましょう。先生はこのとき、いま自分が気にかけているのは「僕」の気持ちであるということをお伝えようとしています。「あなたが(自分のしたことの意味を)解つたなら、それでこの問題は解決だ」と先生が話した意図を考えましょう。

- (7) 「僕」が戸惑ったのは、「あんまり勝手過ぎる」ように感じたためです。「あんまり勝手過ぎる」とは、あまりに「僕」の勝手過ぎる、つまり、

「僕」ばかりが得をするような展開になっている、ということを表しています。

- (1) ア
 (2) (例) 海月は人との距離の取り方がうまく、誰とでもやっていけ、みんなから好かれている人だと思っているから。
 (3) イ
 (4) エ
 (5) (例) 樹絵里は自分の傲慢な気持ちを見通しているのに、自分はそういう樹絵里の気持ちに気づかず、樹絵里を自分より格下の守るべき存在だと思っていた点。
 (6) (例) 自分は、口先だけで良子を誘ったけれども、心の中では「自業自得だ」と突き放しているのに対し、樹絵里は良子のことを苦手だと言いながらも、部に迎え入れてあげようと提案する点。

《解説》

- (1) このあとの「奇数のとき、余っちゃうかもしれない。偶数のときでも、余り者同士で仕方なく組むことになるかもしれない。あと、グループ分けでもさ。どのグループも、私のこと、いらないうって言ったらどうしよう……」という部分に、樹絵里のいう「二人組」の怖さが説明されています。ここで表されている「怖さ」とは、「組む相手がだれもいない」、つまり「自分が必要とされていないことを思い知らされる」ということに対する恐怖です。したがって、「きらいな人と組まなくてはならない」または「一緒に組みたい人と組めないかもしれない」などのように、特定のだれかと組む・組まないという問題をjしているわけではありません。

- (2) 樹絵里のせりふから、樹絵里が海月をどのような人物だととらえているかを確かめましょう。樹絵里は海月のことを「みんなに好かれて、誰とでもうまくやっていける人」だと思っており、その一因は「距離の取り方がうまい」ことであると分析しています。このほか、樹絵里が海月

について述べている部分では「絶対相手を拒絶しない」などもあります。これは「距離の取り方がうまい」ことの一例であると考えられますから、解答にはとりたてて書く必要はありません。

- (3) 樹絵里が「それはもう嬉しそうに笑った」理由は、海月がとっさに「え？ 私は別にジュジュを嫌ってなんか……」と言ったからだと考えられるので、「自分の言葉を打ち消そうとしてくれたことを喜ぶ気持ち」とある、イが正解です。さらに、アは「自分のことを海月はきらっていないはずなのに」の部分、エは「自分のことを海月は仕方なく受け入れているはずなのに」がまた、本文の内容に合っていません。

- (4) 「樹絵里の話には、実のところうまくやれる自信があった」の部分に着目すると、海月が私立中学を受験した目的は、女の子同士の面倒な人間関係を、一度すっきりリセットしてやり直すことだったとわかります。したがって、このことが書かれているエが正解になります。アは、海月は「きらいな樹絵里のせいだと決めつけ」とありますが、海月は樹絵里をきらってはいないので誤りです。イは「勉強をするために中学受験をするべき」だと海月が考えているかどうかは本文中では示されていないので、誤りです。ウは、「樹絵里との関係をつらいと思うことがたびたびあった」の部分が本文に合っていません。

- (5) 海月は、自分が思い上がっていたことに対して「恥ずかしい」と思っています。この「思い上がり」とはどういうことなのかを、まず本文からとらえます。すると、「私は彼女のことを侮っていて守るべき存在だと思っていた」という部分が見つかりますから、ここを中心に解答をまとめます。また、設問に「樹絵里と比較して」とありますから、海月と対照的な樹絵里の様子についても記述することを忘れないようにしましょう。樹絵里は、相手を侮って思い上がっていた自分とは反対に、「私のこんな傲慢な思いをちゃんと知って(た)」とありますから、この部分を使って答えをまとめましょう。

- (6) 記述問題では、まず答えの核となる部分を書いてから、そこに設問の条件や字数指定に応じて、内容を肉付けしていきます。ここでは、まず樹絵里のどういう点が優いかについて記述し、そのあとで、それに對して自分はどうなのか、をつけ加えるとよいでしょう。まず、樹絵里が